

カタルーニャ・クロッシング

カタルーニャと日本。人や企業、そして芸術、生活がクロスする現場を探ります。

第13回 **田澤 耕氏**
法政大学名誉教授 カタルーニャ文学研究者

「発音の手がかりは付録のカセットテープだけでした」

第13回は満を持して田澤先生の登場です。多くのカタルーニャ文学の翻訳、カタルーニャ語辞書の編纂に続き「日本文学短編選集」をカタルーニャ語で刊行されたばかりです。今回は神戸に伺って先生とカタルーニャのクロッシングを詳しくお聞きしてきました。



AMICS 先生は一橋大学卒業後、東京銀行に就職されたんですよね。学生時代からスペイン語を学ばれたのでしょうか？

田澤 大学は社会学部です。全くもってだめな学生だったんですよ。家が横浜でしたから通学は2時間たっぷりかかる。だからそもそも行かなくなる。行くのは体育と語学ぐらい。あとは友達に支えられての卒業です。ゆるい大学だったので助かったんですね。第二外国語はフランス語でしたから、スペインには全く縁がありませんでした。それでも就職は楽な時代でした。金融がやりたかったわけではなく知識もありませんでしたが、日本の銀行は特に専門知識を要求されませんでしたからね。ともかく海外に行きたかったんです。あとは商社。でも商社だと僻地に行かされるじゃないですか。都会好きの私としては遠慮しました。東京銀行にはMBAの留学制度がありましたのでアメリカを志望しました。これも一回では受かりませんでした。それでも行きたいというアピールにはなったようで、4年目くらいでしたかね、突然支店長に呼ばれました。「君は来月からスペインに行くことになったから語学研修を受けてもらう。フランス語をとってんだから、スペイン語もがんばれば大丈夫だろう」ということで1978年に行くんです。まだスペインはEUに入っていないくて、入る以前にマドリッドに支店をつくりたい。その準備室ができていたんです。スペイン語ができる人材を育成しなきゃいけない。でもマドリッドだと日本人が多いし、どうしても便利使いしてしまう。それでバルセロナで語学研修せよという社命になりました。

AMICS スペインを望んだわけでもないし、バルセロナも向こうからやってきたと。

田澤 たまたまです。そしてこの1978年頃というのはフランコ政権が終り、全土で民主化に動きます。それと合わせてカタルーニャの自治が立ち上がる時期だったんです。街の中の道路標記がスペイン語のフランコ的な名前から、カタルーニャ的な名前に次々と変わって行くのを目撃しました。この体験が後々の研究テーマにつながっていきます。バルセロナでの語学勉強は一年弱続きました。サンタンデルのサマースクールではマドリッド大学に留学していた妻と知り合います。マドリッドの開設備室に戻り彼女と結婚し、二人でカサ・ド・ブラジルという学生寮に住みました。この学生寮に萩内さん(萩内勝之)というかなり型破りな日本人が夫婦で住んでまして知り合いになるんです。どう見てもテキ屋風の彼は実は東京経済大学の先生でして後にドン・キホーテを翻訳されるんです。彼と話しているとき私でもできるんじゃないかなあ…なんて気になったのを覚えてい



ます。銀行の仕事はというと一緒に働いているスペイン人の行員は、夏になると1ヶ月の休みをとってバルセロナを出て行ってしまう。こちらは日本人ですから1週間程度。妻は大学生だし私だけが忙しくなる。そのあと日本に戻り神戸支店で融資を担当するんですが、中小企業の多い地域での営業はとでもしんどくて、日本にいてスペイン人みたいに休める職業はないかと考え始めました。転職するなら1ヶ月の休みが取れる職業がいい…はて？一つだけありました。それが大学の先生です。大学の教員は免許も要らない。萩内さんのような風変わりな方でも勤まるとね(笑)

AMICS スペイン語の教員になって1ヶ月の休みを取ろうというわけですね。

田澤 スペイン語は一生懸命やっていたんですよ。大学時代と違って会社でお金もらって、学校行っているんですから。大阪外大に編入していた妻からの情報では、大阪外大の大学院に2年行けば大学の先生になれるらしい。しかもアカデミックでいろんな知識を問う東京外大に対して、大阪外大の試験は訳だけだというんです。スペイン史は知らなくても和訳、スペイン語訳はバッチリですから合格です。さて今度は研究テーマを決めなきゃいけない。1978年のバルセロナで見た光景が蘇りました。テーマは「カタルーニャの言葉と文化」です。カタルーニャ語とカタルーニャ自治の復権。通りの名前が象徴的ですが言葉と政治、言葉と社会、日本にいたら意識しないようなものとの関係。スペインだってマドリッドにいたら「大言語」ですからそんなことは意識しないでしょう。「小言語」というのは常に脅かされる存在。だから意識的に守ろうとしないと守れない。権利を主張しないと生き残れないわけです。当事者には申し訳ないですが、そこが面白いと思えました。もちろん体験したバルセロナの街の魅力もあります。マドリッドと比べるとだいぶ魅力的です。海がありコスモポリタンな空気が流れています。

ここが私とカタルーニャ語とのスタートです。

AMICS 指導してくれる人はいないですよね。どうやって始められたんですか？

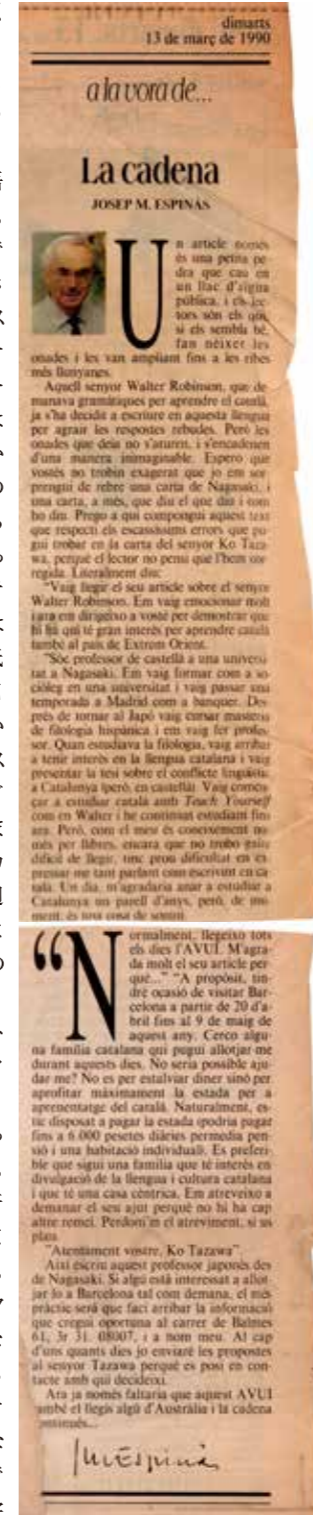
田澤 日本語で書かれた本などありません。インターネットもYoutubeもないんですから。言語を学ぶのに音さえ聴けない。見つけたのは英語、あるいは時にスペイン語で書かれた入門書。それにたまにカセットがついていたんです。それが音源の全てです。フランス語を少しかじっていましたから多少はわかりそうとはいえ、スペイン語と違って発音は難しい。なかなか進みません。一方で大学院の後、大学教員になるわけですけど、スペイン語の先生は一年にポストが出てくるのはひとつかふたつと常に就職難。1986年も募集があったのが全国で二つでした。たまたま運よく長崎外国語短大に決まったんです。そうじゃなかったら生活はそうとう厳しくなっただけでしょうね。

AMICS スペイン語を教えながら、カセットの後はカタルーニャ語をどうやって追っていったんでしょうか

田澤 長崎ではカタルーニャ語の日刊紙「Avui」を購読していました。当時ですから航空便で届けられるんですよ。本とカセットテープでは限界にきていた私は、Avuiの有名なコラムニストに手紙を書いたんです。「バルセロナに行き10日ぐらいでいいからカタルーニャ人と暮らしたい。泊めてくれる家はないだろうか」とね。返事をもらえるかなと思っているとある日、Avuiの彼のコラムに私の手紙がそのまま載っているんですよ。これには私も妻もまさにびっくり仰天です。さらに次の展開で読者からのレスポンスが掲載され、ついにはコラムニストを通じて20通くらい手紙が送られてきました。善意というか、日本人がカタルーニャ語をやりたいというのに感激しているわけです。あるレストランの店主からは毎日うちにきてタダで食べていいからという手紙もありました。選びようがないので中心であるカタルーニャ広場に近いところにし、2週間ぐらいのホームステイ生活です。いよいよカセットを超えたカタルーニャ語のスタートです。38歳でした。

AMICS すごい！手紙ですか！ストレートすぎてなかなか取れないアクションですね。

田澤 うーん、サラリーマンだったらなかなかできないでしょうけどね。行き当たりばったりですけど(笑)。長崎外大を5年勤めて関西外大に移ります。博士号も取りたいと思えました。持ってなかったんですよ。日本はドクターを持ってなくても大学の先生になれる珍しい国ですから。でもどうしても取りたい。妻に無理を言ってバルセロナ大学に留学してドクターをとることにするんです。1993年に子供を連れて4人で行きました。スペイン政府からの奨学



金です。月10万円くらいですから家族4人には厳しいですが、学費がタダになる、健康保険がつく。それだけでも助かりました。同時にバルセロナ大学からは日本語の講座を作りたいからやってくれと言われてましたが、日本語を教える技術もない。そこで渡西する半年くらい前から付け焼き刃で勉強しました。日本語主任講師の出来上がりです。こういうのは銀行員は得意なんです。半年あったらその道の専門家みたいな顔をする。銀行員はそうじゃなきゃいかんと言われてきましたから(笑)。帰ってくるタイミングの1995年、神戸淡路大震災が起き帰国が延びましたが、このほぼ3年間が現在への始まりだったと思います。

AMICS 現地バルセロナではさらにいろいろな行き当たりばったり(笑)があったのでしょうか。

田澤 留学することになったことを先ほどのコラムニストに知らせたんです。すると「じゃあ、今までやってきたことを本にしなさいか。カタルーニャ語で出さないか」と返ってきました。それが「カタルーニャと一人の日本人」という本で、向こうでベストセラーになりました。ベストセラーといっても3000部くらいですよ。一回の版は700部くらいなんです。ですからベストセラー。もらったのは30万円くらいかな。この3年間は妻もバルセロナ大学付属のカタルーニャ語学校に行きました。子供たちが現地の学校にいきますからいわゆるママ友ができる。もちろん彼女たちはスペイン語でも通じます。ですが本音のところはカタルーニャ語でないと行けない。少数言語を話すということは一つの態度表明、意思表示になるんですね。自分はあなたたちの中に入って行く意思がある。そういうアピールなんです。そしてそのママ友たちは今でも彼女の大事な友人です。逆に駐在員で長くいても頑なにカタルーニャ語は話さないという人もいますけど、それは勿体無いことだと思います。

AMICS 大学、子供の世界、親同士とカタルーニャ語3層構造ですね。もっとその続きを伺いたいんですが、あつという間に時間が来てしまいました。あらためてお聞きします。先生にとってのカタルーニャはどんな存在になるのでしょうか

田澤 最初のバルセロナから40年以上です。カタルーニャ語とはこうして行き当たりばったりで付き合いが進んできました。私の人生であり、その競技フィールドですね。もし私がフランス語や英語、そういう大きな言語の競技をしていたら、本を書かないか？とか、ベストセラーになるとか、あるいは向こうへ行くテレビ、ラジオに呼ばれて話をするとか、新聞に不定期だけどコラムを書くとか、これほど面白い場はやってこなかったでしょう。小さい言語、少数言語だからこそ与えられる、小さいフィールドだからこそ、宝物のような充実感がある。だから私の人生の「土俵」かな。決してスタジアムじゃない。そして相性ともいえるかな。カタルーニャに行くとかラクというか、楽しいというか、気が合うんですね。さらに幸運なのは妻も二人の息子もみんなカタルーニャが好きなんですよ！

<AMICSの眼>

口癖のように「たまたま」「行き当たりばったり」と話す先生ですが、実はそれは先生とカタルーニャ双方のアクションの産物ですね。そこには自ら主張しなければ生き残れない「小言語」故の切迫感があるのかもしれない。もともとヒゲの薄い先生だが、バルセロナでは立派に生え揃うそうだ。そういうえば毛髪は大事なものを守るためにあるはずだ。

(取材/文 原正彦)

田澤 耕 1953年横浜市生まれ。バルセロナ大学博士号(カタルーニャ語学)取得。「カタルーニャ語辞典」大学書林、2002、「詳しく学ぶカタルーニャ語文法」白水社、2021などの辞書・語学書の他、J.マルトウレイ、M.J.ダ・ガルバ著「ティラン・ロ・プラン」(岩波書店、2007)の翻訳をはじめとする、カタルーニャ語文学翻訳多数。2003年カタルーニャ州政府サン・ジョルディ十字勲章受章、2018年、カタルーニャ語作家協会(AELC)名誉会員。2019年4月、法政大学名誉教授。2019年、ラモン・リュイ財団国際賞受賞。